

\*\*\*\*\*

## 世界の子どもと教育を考える

### シネマ上映会

\*\*\*\*\*

#### 第1章 プロジェクトの概要

##### 1. プロジェクトの名称

世界の子どもと教育を考えるシネマ上映会

##### 〈活動目的〉

世界で戦争や貧困，差別，人権等，様々な問題があり，平和な国とうたわれる日本では想像できない。グローバル化の今，世界の子ども達に目を向けることは，教員になる可能性のある京都教育大学生にとって必須である。本プロジェクトを通して異文化理解のきっかけと，子どもにとっての教育を考え直す機会を創る。

##### 2. 代表者および構成員

###### ・代表者

若林東 体育領域専攻 4回生

###### ・構成員

高桑詩乃 体育領域専攻 4回生

清水香那 幼児教育専攻 4回生

##### 3. 助言教員

井谷恵子（体育学科）

#### 第2章 内容と実施経過

##### 1. 第一回シネマ上映会

###### (1) 上映作品

「さとにきたらええやん」

京都シネマでの上映された，大阪市西成区釜ヶ崎にある「こどもの里」を舞台にした，ドキュメンタリー映画。様々な事情を抱える子どもが集う「さと」では，悩み，立ち止まりながら力強

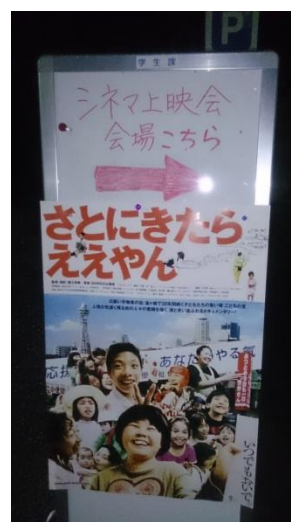
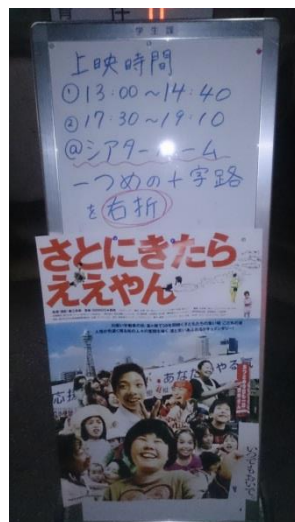
く成長していく子ども達と，それを支える職員の姿が描かれている。子どもの居場所について考えさせられる作品となっている。

###### (2) 日時・広報活動

上映日時：平成28年12月21日（水）

13：00～14：40，17：30～19：10

広報は，本大学の食堂前でチラシの配布を行ったり，学内の掲示板にポスターを貼った。また，大学の先生にお願いし，授業時間内での宣伝に協力して頂いたり，学内でのメールの一斉配信，本学ホームページに掲載して頂いた。当日は案内板を二つ設置し，道案内を行った。



##### 2. 第二回シネマ上映会

###### (1) 上映作品

「バベルの学校」

世界中から集まった，様々な国籍の子ども達の過ごす，パリの中学校。ここには，家庭の事情や亡命でやってきたものなど24人の生徒がおり，20の国籍が存在する。この多文化学級で，子ども達は時にぶつかりながら友情を育んでいく。世界の教育を考える作品となっている。

###### (2) 日時・広報活動

上映日時：平成29年1月18日（水）

13：00～14：30

広報は，本大学の食堂前でチラシの配布を行い，学内の掲示板にポスターを貼った。また，大学の先生にお願いし，授業時間内での宣伝に協

力して頂いた。



### 第3章 結果と成果

#### 1. 第一回シネマ上映会

##### (1) 参加者

参加者は、一回目の上映が14名、二回目の上映が11名の計25名であった。参加者にはシネマ上映後にアンケートに回答して頂いた。

##### (2) 結果と成果

ポスターやチラシ、大学の一斉配信メール、知人等、本活動を知ったきっかけにさほど差はなく、広報はどれも有効であったと考えられた。上映を二回行うことで参加者数の拡大を図ったが、二回目上映では、一回目上映に会議等で参加できなかった教員などの参加を得ることができ、参加者拡大につながった。アンケートの結果から、多くの参加者がシネマの内容に興味を持ったことが分かった。特に、「子どもの居場所」、「子どもと親の関係」、「西成の現状」、「地域で子どもを支える」という内容に興味を持ったものが多かった。

また、自分たちが何不自由なく暮らしている身近に、様々な問題を抱えて居場所を求めている子どもがいること、その子どもたちに居場所を作ろうと向き合う人々がいることを初めて知った、感動したという感想が多く、教育の在り方を考える機会になったと考えられた。

#### 2. 第二回シネマ上映会

##### (1) 参加者

参加者は、15名であった。第一回シネマ上映

会に参加して下さった方の参加が多く、本活動に興味を持って頂けたと感じられた。第一回シネマ上映会と同様、シネマ上映後にアンケートに回答して頂いた。

##### (2) 結果

第二回シネマ上映会の、第一回と同様、ポスターやチラシ、大学の一斉配信メール、知人等、本活動を知ったきっかけにさほど差はなく、広報はどれも有効であったと考えられた。アンケートの結果から、第一回と違い、シネマの内容が外国のものへと変わっていたが、多くのものが興味を持っていたことが分かった。特に、「外国籍の子どもの現状」、「人間の根本的な問題」、「子ども同士の関わり」という内容に興味を持ったものが多かった。

また、身近でなかったために今まで考えてこなかった、外国の子どもに関して考える必要があると感じた、共存とは何かを考えた、宗教や考え方が違う人たちへの指導が難しい、といった意見が多かった。外国籍の児童生徒が増加している日本で、外国の子どもとその指導について関心を持ち、考える機会になったと考えられた。

### 第4章 まとめ

#### 1. 改善点

##### (1) 学生参加者の拡大

今回の活動では、本学教員や連合大学院生の参加者が多くを占め、一般の学部生は少なかった。より多くの、将来教員になる可能性のある学部生が視聴することで、一層世界の現状や教育、子どもにとっての教育の意味を考える人が増え、よりよい教育につながると考えられる。

##### (2) 上映場所への確実な案内

今回は、上映会開催の当日に、正門前と講堂前に立て看板を二つ設置し、会場周辺に構成員一人を配置し、会場案内を行った。しかし、道に迷って上映開始時刻までに間に合わない人が数人いた。案内の一層の確実化が求められる。

## 2. 今後に向けて

今回は、日本と世界で対応した内容の作品を上映した。参加者数、興味を持った度合いのどちらでも、第一回シネマ上映会が第二回を上回ったが、どちらの上映会でも、子どもにとっての教育の意味、また、その在り方、さらには、外国の子どもについて考える必要性を感じる機会となった。参加者の中から、本活動の今後の存続を願う声を直接頂いた。アンケート結果からも、本活動が意味のあるものであるということも示され、今後の本活動の継続と、更なる発展ができるよう考えていきたい。

## 付録 アンケート調査

〈アンケート調査の質問項目〉

1. 上映する映画を知っていたか
2. 今回の企画をどのようにして知ったか
3. 映画の内容に興味を持ったか
4. どのような内容に興味を持ったか
5. 映画を見た感想
6. 世界で起きている様々な教育問題を取り扱った映画をほかに知っているか

〈第一回上映会アンケート結果〉

1. 上映する映画を知っていたか  
はい ……10名  
いいえ……14名  
無回答……1名
2. 今回の企画をどのように知ったか  
ポスター ……5名  
チラシ ……4名  
学内一斉配信メール……3名  
知人から ……9名  
その他 ……4名  
その他には「さとにきたらええやん公式ホームページ」や「先生の宣伝」等が挙げられた。

## 3. 映画の内容に興味を持ったか

持った ……23名  
少し持った ……0名  
あまり持たなかった……1名  
持たなかった ……0名  
無回答 ……1名

## 4. どのような内容に興味を持ったか

- ・単なるインタビューではなく、日常が写し取られていたのがより現実的で興味が持てた。一人ひとりが生きていくためにはいろいろな人が関わっているのだと実感した。
- ・児相やその他の施設にこのような施設があり、子どもや親を助けていること。このような施設と、地域があること。
- ・出てきた子どもたちが教え子であった。
- ・しんどい家庭や社会の中で生きている子どもたち、それを支援する職員の方々。
- ・大阪という街で起きていることと、大人子ども問わず毎日を楽しく頑張る姿勢。
- ・貧困等様々な問題を抱える子どもたちや家庭への、地域やコミュニティとしての関わり方。
- ・すでに知っていたこどもの里が 24 時間活動していたこと。
- ・多くの問題を抱える街で、子どもの居場所を作っていること。
- ・子どもに対してもホームレス理解を促していること。
- ・大阪の格差、子どものリアルな姿、普段焦点が当てられない「隠れている問題」について。
- ・大学にいるとほとんど見えない子どもたちや、困難の中に生きる人々。
- ・人が生きていくしんどさ、ひたむきさ・明るさ。人と人が一緒にいることの意味。
- ・こどもの里の存在。
- ・すべての子どもたちに自分に何が出来るか。「夜回りしても現実が変わるわけではない」という

言葉.

- ・利益を求めず、子どもや保護者のためにある里.
- ・生の生活観、西成の現状、里という施設、それぞれの人生、施設の職員.
- ・学校以外の人々や施設の関わり、支援の在り方.
- ・子どもたちにとっての里.
- ・里があることによって子どもが生きいきとし、大人の希望となること.
- ・子どもの成長. 親の成長. 行政や学校が抱えきれない人々に対する職員、子どもへの愛.
- ・里で暮らす子どもの存在.

## 5. 映画を見た感想

- ・自転車に乗れなかった子どもが乗れるようになった姿を見て、どんな環境にいても人は成長し、変わると感じた.
- ・教え子たちが出ており、やはり子どものことを全て見てあげることができないのだと感じた.
- ・こどもの里は素敵な所であると思った.
- ・とても心に響いた. 子どもの里を減らして子どもと親を幸せに、ではなく、子どもたちや里のみなさんのような人が心安らかに暮らせるような仕事をしていこうと思った.
- ・個々に抱えている様々な複雑な問題に、日々正面から向き合っている里の方々に心を打たれた. 転んでも何度も自転車に挑戦し、最後は乗りこなしている子どもの姿が印象的だった.
- ・家庭. 親という「当たり前」がうまくいかない現状と、その中でそれぞれが頑張っている姿が切なかった. 学校での発表がうわべなのが少し悲しい.
- ・変えていくのが難しい状況で、少しでも子どもたちを救おうと尽力する姿に感銘を受けた. 子どもだけでなく親にとっても（里は）必要な場所であるのだと思った.
- ・子どもを預かるだけでなく、教育としての機能を持っていると感じ驚いた. 積極的な家庭への働きかけはなかなかできないと思った.

- ・自分の生き方を選べない人がいる、これは他人事ではなく、この社会がそういう存在を作っている.
- ・貧困や相手を思いやる心など、わかったつもりで全く分かっていなかったと気が付いた.
- ・寄り添うとは、双方向のこういうものなのだと思う.
- ・このような状況があること、これに向き合っていたくましく生きていることが知れてよかった.
- ・初めてドキュメンタリー映画を見て、心が温かくなった.
- ・子どもがどこまでも自転車に乗っていくラストシーンに心が救われた.
- ・自分は普通に親と過ごし、普通に勉強をしてきた. 教員を目指すうえで、自分のような《生き方がすべてではなく、いろいろな子どもがいるということを知らないといけないと思った.
- ・人間臭さに感動した. それぞれの人生が目いっぱい、素晴らしい映画. ほかの教育関係者にも見てほしい.
- ・非常にパワーのあるドキュメンタリー. 教師を志す若い人々にも見てほしい.
- ・様々な背景の人々の生きる道と自分の生きる道を重ねてみてしまった. 親の思い、子の思い、言葉にはできないやるせなさを感じた.
- ・公的な支援でないからできることがある一方、個人の支援には難しさもあると感じた.
- ・やらせでない本物のドキュメンタリーすごい. 子どもたちと野宿している人々との交流は最高の人間教育.
- ・子どもたちも親も地域も、みんな一生懸命に頑張っていると思った. この里では、子どもも大人も成長できると思った.
- ・当たり前のようにそこにある、という環境が、子ども、親、おっちゃんたちにとって大切な場所なのだと思う. あそこまで理解された場を作るのは難しいが、居場所づくりのヒントにしたい.

## 6. 世界で起きている様々な教育問題を取り扱った

映画をほかに知っているか

- ・みんなの学校
- ・チョコレートドーナツ
- ・いしぶみ
- ・グッド・ライ
- ・ある精肉店の話
- ・甘くない砂糖の話
- ・誰も知らない
- ・ハッシュ

〈第二回上映会アンケート結果〉

### 1. 上映する映画を知っていたか

はい ……0名

いいえ……15名

### 2. 今回の企画をどのようにして知ったか

ポスター ……2名

チラシ ……5名

学内一斉配信メール……3名

知人から ……4名

その他 ……1名

### 3. 映画の内容に興味を持ったか

持った ……12名

少し持った ……3名

あまり持たなかった……0名

持たなかった ……0名

### 4. どのような内容に興味を持ったか

- ・多くの国の人が同じ場所で学んでいるという点。個々に違った背景を持っていること。
- ・生徒の心境をリアルに表していること。
- ・海外からの生徒の受け入れクラスがあること。とても様々で時にはつらい状況で移民としてパリへやってきた生徒たちの人生に、人とはなんだろうと考えさせられた。

- ・思ったより色々な国籍の子が色々な事情を抱えて、フランスの学校で葛藤していたところ。
- ・外国での日常的な移民の問題について
- ・様々な国籍を持つ子どもたちが適応クラスで学び、自分の意見を持ちながらお互いを理解していくところ。
- ・母国語以外で勉強することの難しさ。
- ・適応クラスの子どもの保護者はどのようにしてこの学校の存在を知ったのか。
- ・地球には疑問だらけで誰の言った何が正しいとか正しくないとか、子どもたちが必死で意見を言っていたところ。
- ・多国籍の子どもたちが同じ空間で学び、そして全力でぶつかり合っている姿に興味を持った。異なる文化で育った子が同じ教室で学ぶこと。
- ・多様な国籍の多様な子が学ぶ場がある点。
- ・14～15歳くらいの生徒が宗教や国家について哲学的で人間の根源的な問題について討論していた。そこに先生が介入していないところが素晴らしい。
- ・国籍がバラバラな子どもそれぞれの人生経験。

### 5. 映画を見た感想

- ・自分の今の状況がいかに恵まれたものなのか知ることができた。自分の今の知っている世界は本当に限られたものでもっと多くのことを知らなければならなかった。
- ・外国の教育の現状を改めて知った。言葉や考え方も異なる人たちに教育することは、とても難しいと思った。考えさせられる内容だった。
- ・生徒たちの服装が自由で、日本の生徒指導に見られるような髪の色やスカートの長さを気にするよりも実践で生きることの問題に立ち向かっていける先生をうらやましく思った。
- ・私にはまだまだ知らない世界がいっぱいある。保護者の教育、指導は大切だと思った。
- ・共存や対話という言葉が最近特に耳にするが、この映画の中でその言葉は特に地や体温を持つ

たものとなって描かれている。心にしみた。先生の在り方も勉強になる。

・ でんげい

- ・ 指導する側で見るとすごく大変だろうと感じた。学級に受け入れ態勢が整っていて対応できる組織がないと難しい部分が多くあるだろうと思った。
- ・ 自分が子どものときは周りに外国籍の人がいなかったのでもあまり深く考えたことはなかったが、これから教員になるに当たり、知って考える必要があることだと思った。
- ・ 宗教をめぐる対立したり言葉や容姿でからわれたりしながら、色々なことを感じ、考え、経験している子どもたちの姿が感動的だった。
- ・ 日本には会うことのない中東やアフリカからの移民の子どもたちが、それぞれの家庭環境、宗教、人種をもって、関わりぶつかり合っていて、世界には本当に知らないことがたくさんあると思った。
- ・ 私自身、日本語教育を大学のために専攻しており、日本語教師の資格を持っているので子どもたちと向き合っていきたいと思った。
- ・ 「友達はいないけど神様がいる」という考えが印象的だった。異なる文化に触れる機会は映画でもできると改めて感じることもできた。
- ・ 多様性を受け入れる度量が必要なことを改めて感じさせられた。
- ・ とても素晴らしいドキュメンタリーだった。
- ・ 1年間苦勞があった分最後の別れがすごくいいものになっていた。
- ・ とても考えさせられる内容だった。それぞれの国の、それぞれの事情で大きなものを背負っている子どもたちの生の声が聞けたのがよかった。

## 6. 世界で起きている様々な教育問題を取り扱った映画をほかに知っているか

- ・ みんなの学校が教えてくれたこと
- ・ みんなの学校
- ・ 60万回のトライ